

安全運転継続へ支援の試み

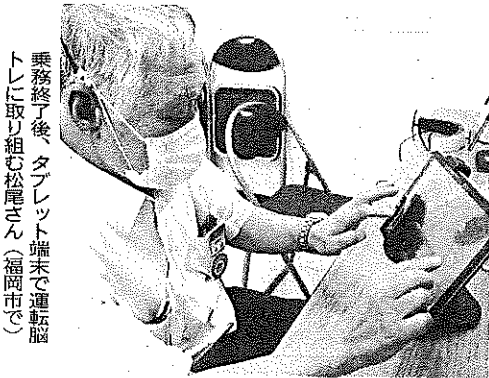
交通事故件数は減少傾向にある中、近年、高齢者の運転による重大事故が目立つ。高齢になっても仕事や日常生活で安全に運転を続けられるように、認知機能の維持に向けたトレーニングをしたり、急ブレーキなどの危険な運転がなかったかを振り返ったりする試みが始まっている。

(阿部明霞)

7月中旬、福岡市の西日本鉄道・柏原自動車営業所で、この日の路線バスの乗務を終えた運転士の松尾伸也さん(62)が、タブレット端末で認知機能のトレーニングに臨んだ。

ゲーム形式で、画面に現れる複数の道路標識のうち同じものを素早くタップしたり、イラストの車が停止線に合わせて止まるようにタイミング良くタップしたり。操作は簡単で、各ゲームは一分ほどで終わった。

脳科学に基づくアプリを開発する会社「NEU(ニュー)」（東京）の「運転脳トレ」で、スマートフォンなどで手軽に記憶力や注意力などを改善してもらおう狙いだという。西日本鉄道は、認知機能の維持や向上によって安全運転につながろうと、今年6〜7月に試験的に2か所の営業所で導入した。



乗務終了後、タブレット端末で運転脳トレに取り組む松尾さん(福岡市)

バス会社が脳トレ導入

7月中旬、福岡市の西日本鉄道・柏原自動車営業所で、この日の路線バスの乗務を終えた運転士の松尾伸也さん(62)が、タブレット端末で認知機能のトレーニングに臨んだ。

同社では従来、運転士が毎月参加する会議で、交通事故につながる恐れがある「ヒヤリハット」事例を共有したり、



車内のバックミラー横のドライブレコーダーから流れる「安全運転スコア」の説明に耳を傾ける佐藤さん(東京都東村山市)

走行の危険度診断

非常ドアを実際に使う訓練をしたりして安全意識を高めてきた。

「前回の運転診断はAでした。東京都東村山市の佐藤さん(67)が自宅の駐車場で車のエンジンをかけると、専用のドライブレコーダーから音が流れた。

「前回の運転診断はAでした。東京都東村山市の佐藤さん(67)が自宅の駐車場で車のエンジンをかけると、専用のドライブレコーダーから音が流れた。」

認知機能衰え 重大ミスも

警察庁のまとめで、運転免許を持つ10万人当たりの交通死亡事故件数を年齢別でみると、運転に不慣れな10代を別にとすると、65歳以降で年齢が高くなるほど多い。加齢に伴って認知機能が衰えると、交差点で赤信号を見落として進入するといった運転ミスをしやすくなるが一因だ。

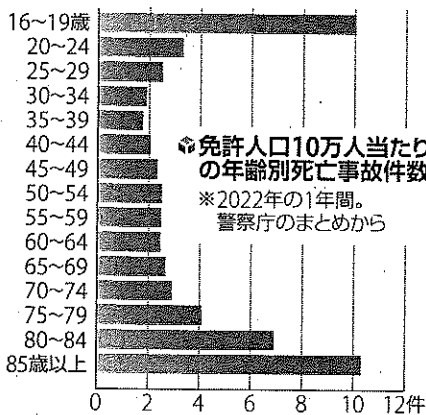
同庁などは、運転に不安を感じるようになったら、免許の自主返納ができると呼びかけている。

また、道路交通法では、免許更新時に75歳以上の場合、記憶力や判断力を測定する「認知機能検査」を受けなければならない。「認知症のおそれがある」と判定された後、医師から認知症と診断されると、免許の取り消しなどを受ける。

一方、認知機能の維持ができれば、安全運転につながることを期待できる。東北大学の川島隆太教授(脳科学)は認知機能を鍛える脳トレを開発し、アプリでの普及を目指している。

1日20分の脳トレを週5回以上、6週間続けた人の運転技能を計測したところ、脳トレを受けなかった人に比べて、右左折時や車線変更などの技能に改善があった。

川島教授は「脳トレで安全運転寿命も延ばせる可能性がある。ただ、やめると徐々に認知機能が元に戻ってしまうので、できるだけ長く継続するのがポイントだ」と話す。



佐藤さんは、大型スーパーへの買い物や家族の送迎などでほぼ毎日、車に乗る。スコアなどに応じて保険料が割引になる仕組みで、3年前の契約時に利用を始めた。

同社は2018年にサービスを始め、利用者は現在約180万人。ソニー損保なども同様のサービスを提供している。